

奥さまは
のりずき



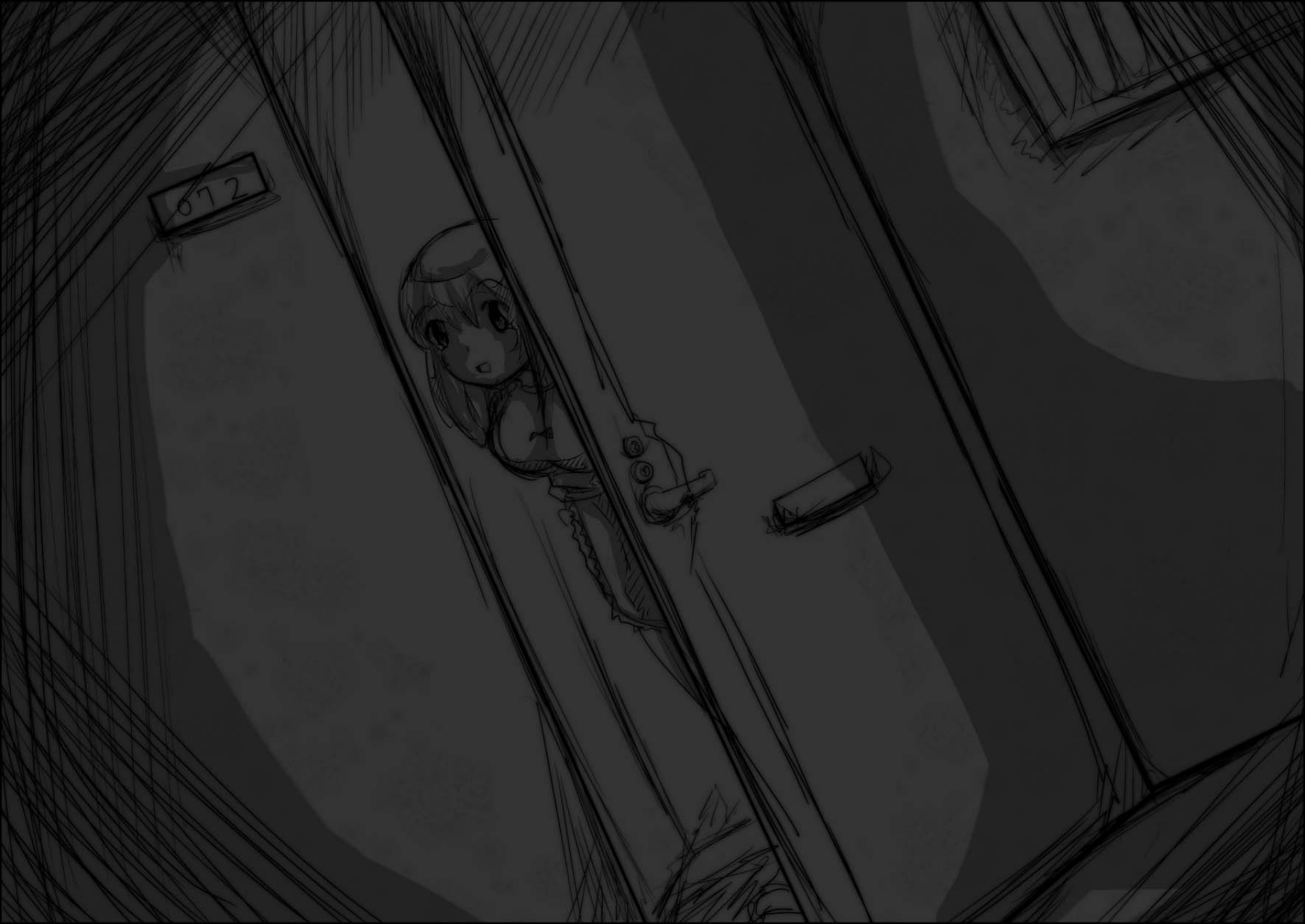
日本一変態が多いという埼玉県某市、
俺はこの町の治安を守る警察官だ。

まだ新米のペーパーで大した仕事は任せられていないが、
それでも仕事にやりがいを感じている。

今日は昼勤だったので普通に夜に帰宅する事ができる。

こんな、まともな時間に帰れるのは久しぶりだ。

——去年結婚し、マンションには俺の愛する妻が待っている。





鍵を開けようと靴を探っていると、
部屋の中から妻の足音が聞こえてきた。
ガチャリと鍵が開き妻が出迎える。

「おかえりなさいーい♪」

これが俺の妻。

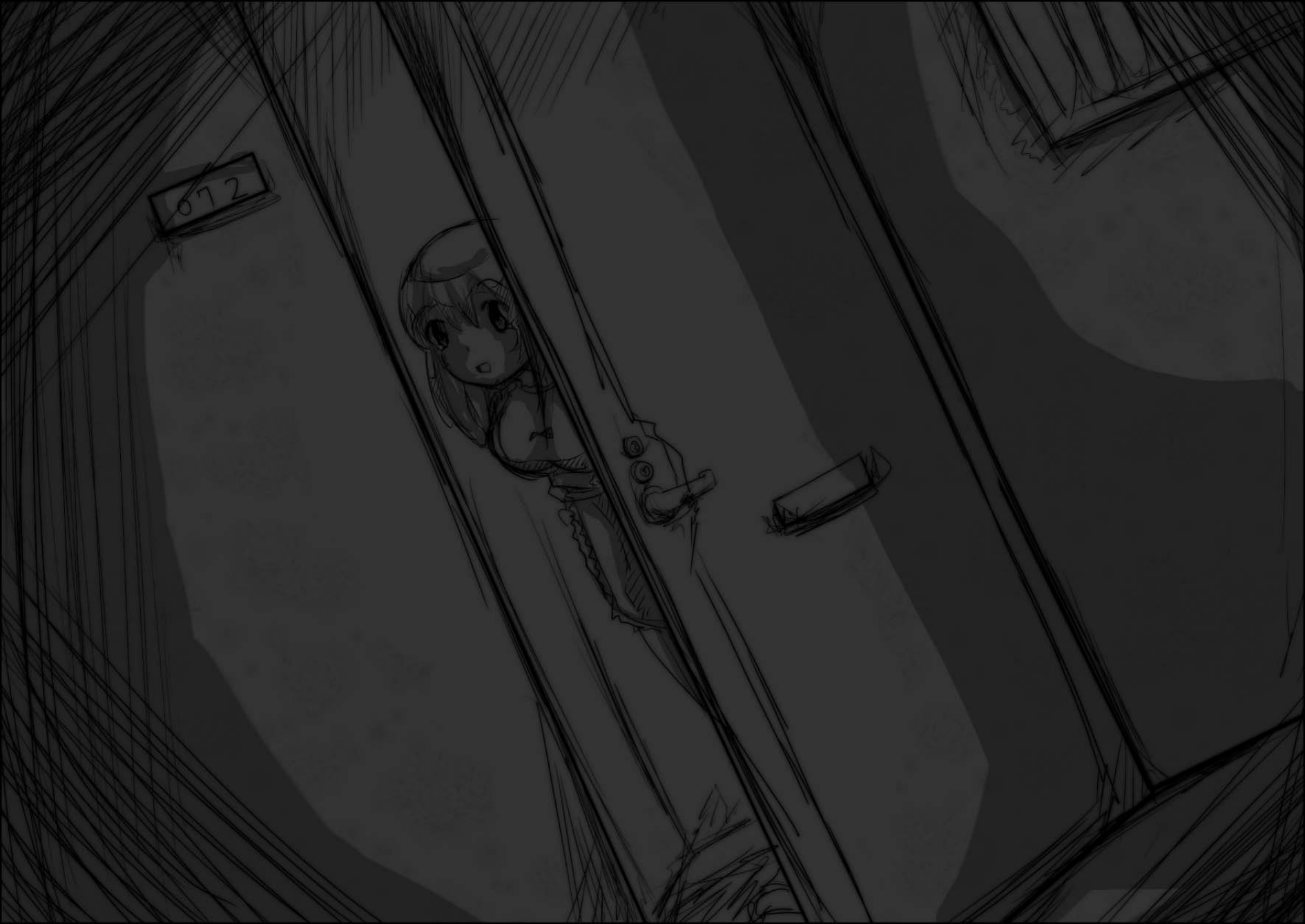
ややぽっちやりしているが、
なかなか顔は良い。

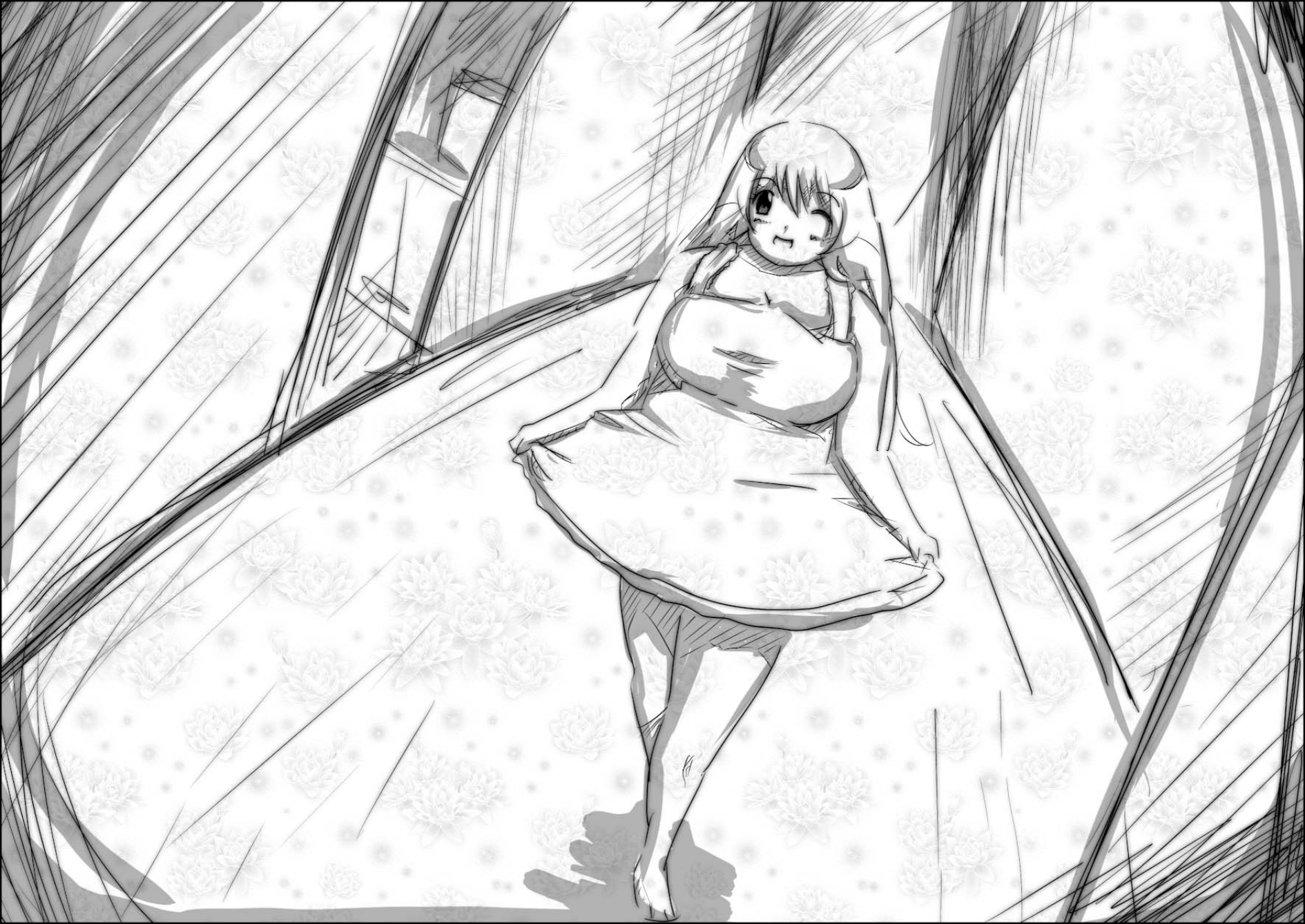
そして何より……。

077

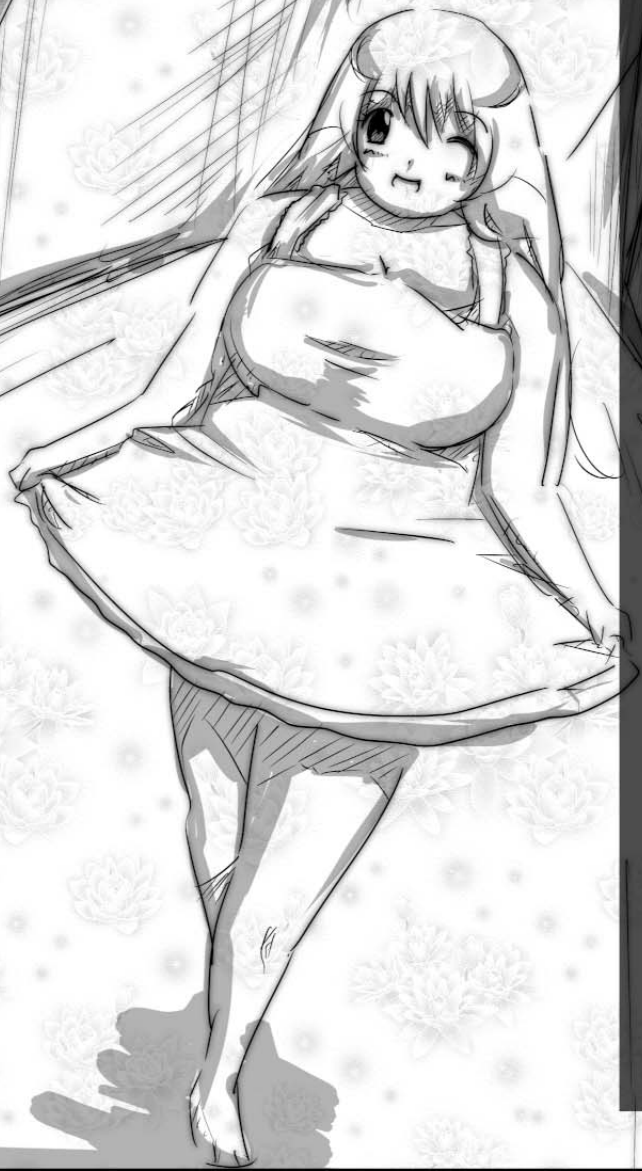


072





妻は裸にエプロンで
出迎えてきた。



「うふふ、
今日はお肉にする？」

それともお肉？

「またはお肉？」



妻はエプロンの端を持ち、
めいっぱい可愛い可愛らしく見せようと
しながら俺に今日のメニューを
訪ねてくる。



「…………お肉しかないじゃないか…………」



昼勤で帰ってくると
いつもこの質問が来る。


そして俺は優しく応える。

「そりゃあ、お肉しかないだろ？」

俺はぐっとエプロンを掴み引っ張る。
「いちゃん♪」

引っ張られたエプロンの端々から
妻の肉体——
いや、肉がはみ出す。





引き離されたエプロンを投げだし
妻が床に仰向けになり股を開く。